

二宮経塚発掘由来

附御開帖きき書

伊田半治
杉本嘉美

瀬尾俊明 上羽春美 田中由美 真下操 千原みち子
市川久枝 山口幸子 柳沢佳津江 真下良子

舞鶴市地頭の二宮神社に詣でると、拝殿左に方一、三米、寄棟造りの小祠堂がある。名づけてお壺社といひあらたかな靈験の故に、昔から遠近のお参りが後をたななかつた。その「お壺さん」がここに祀られた由来を社頭の立札は次のように物語っている。

御壺神社

御祭神ハ不詳ナリト雖云古老ノ伝ニヨレバ嘉祿元酉年四月大日本丹後国加佐郡岡田莊熊浪村於滝尾寺未附書写僧頼全僧復庶願主源氏女十一者明和四丁亥年二月本社再建之節土中ヨリ写経ヲ蔵セシ壺ヲ発掘シ径七寸高一尺五寸更ニ地中ニ埋蔵シ社殿ヲ建設シ古来稱シテ御壺社ト云ヒ本社ノ側ニ祀リ崇敬セルモノナリ。蓋シ昔時神仏混教時代ノ遺物ナラム。氏子 地頭及大俣小俣一円ヲ以テ氏子トス

境内 老千四百式拾五坪

いうところの古老ノ伝を裏付ける書類は地元現存せず、立札が何によつて記載されたものか謎に包まれていた。ただ、通称ベツソ(又はベツショヨ；滝尾寺跡と比定される地)の岩田孝一氏はいう。

「私が子供の頃(御開帖当時)本屋の岩田全次郎氏方に古い軸物があつて、タキオー寺のいわれを書いた大事なものだから粗末にするな。としばしばいわれた。」

この軸も大正末年紛失したまゝである。ところが図らずも昭和四十一年五月、福知山に現存する書物によつて這般の事情が一举に鮮明され、伝承の正しさが立証されると共に、後述の御開帖奇瑞が新たな関心をよんだのである。

その直接の鍵は福知山高校の芦田完先生が機関誌ふくち山に載せられた左の一文であつて、茲に先生の御快諾を得て転載させて載く。

永明寺蔵鎌倉時代の写経断簡

芦田 完

福知山市字牧の永明寺の什物の中に珍らしい一軸がある。それは表は紺紙金泥の写経の一部であり、裏は之を表装した経緯を墨書した文章が貼られている。

まずこの軸に貼つてある写経の断片の文を掲げよう。

読若誦若解説若書写成就八百累功德以是清淨鼻根聞於三千大千世界上下内外種種諸香須臾那華香蘭提華香末利華香摩訶華香波羅華香赤蓮華香青蓮華香

白蓮華香華樹香菓樹香梅檀香沈水香多

右は当寺住職によると法華経の一部であるといふ。

裏面の墨筆は次の通り。

正一位二宮大明神

明和四丁亥春二宮社前殿普請之刻穿得一壺中有銅筒納金紙金泥書写之十卷無量義経大

乗妙典普賢教等全部也願主及執筆者之姓名如後

八幡大菩薩

願主

源氏 女

源実 澄

同法師 丸

物部卜 亮

為 真 安

貞 安

藤井重 守

同 安 沢

同 延 綱

紀 諸 住

秦 武 延

僧 頼 全

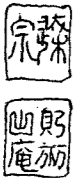
同 慶 禎

同 玄 信

春日大明神

執事

天照皇太神
嘉祿元乙酉九月同二丙戌歳四月未時大日本国丹後州加佐郡岡田莊熊浪邑於滝尾寺書写之云 維時人王八十五代後堀川院御宇也 当今 聖主百十八代御宇及五百四十三年 矣 皆寛政十二庚申歳応需莊殿七世写與之



右を要約すると、明和四年(一七六七)の

春二宮神社の前殿を普請する時一つの壺を掘り出したところ、その中に銀筒があり、金紙(紺紙の誤)金泥の写経十巻が入つていた。それは無量義経大乘妙典普賢経等の全部である。その願主と執筆者はこれこれの人であり天照皇太神、八幡大菩薩、春日大明神へ奉献したもので、嘉祿元年(一一二五)九月から翌二年四月にかけて、丹後国加佐郡岡田莊熊浪村の滝尾寺で書写したものである。寛政十二年(一八〇〇年)に莊殿寺の七世住持が人の求めに応じて、写経の中の願主と執筆者の名を記した部分を写して与う。といふのである。ところがこの軸物を表装したのは、別の経緯書に示す通り文化五年(一八〇八)であるから、前記莊殿寺七世住職の写書は別にあつて、それをこの軸にはる為に再び写したつたものと思われる。こゝにその文を掲げておく。

益人有頭晦皆過去之因縁也不啻人萬物皆然古文尚書秦世孔氏壁中海漢世頌秦徐福持来本邦葺尾州熱田宮今尚存云是皆自然所致也爰丹後国加佐郡地頭村鎮守社後崖高每葺宇苦焉明和三年歳丙戌四月村民集崩崖得一壺然皆農撤其蓋請近隣莊殿寺和尚撤之有紺紙

金泥法華経其終嘉祿元年乙酉按察使中納言奉 勅納丹後国滝尾寺此寺其村北有大伽藍旧跡近隣人聞伝婦仰日日夥訴其領主田辺侯受命誦誦大乘妙典三日新造石函蔵之其上作屋或人有故滞留其村有日聞其說乞得一紙秘歳四十餘年茲歳持来敝院与予別添古全爛日御衣餘也之以表裝欲得伝后世因贅数字云 維時文化五歳在戊辰九月日 施主 何鹿郡志賀町甲斐島長左衛門貞前永明機鋒尖叟欽誌

之を現代風に直すと大体次のようである。人は現われたり隠れたりするが皆過去の因縁である。人間だけでなく万物すべて然り、古文の尚書は秦代に孔子の書と壁の中にかくされていたが、漢代に発見されて徐福がわが国へもたらし(註、秦漢の時代が顛倒しているが原文の通りとする)尾張熱田神宮に今保存されている。ここに丹後国加佐郡地頭村の鎮守の後の崖が高くして屋根を葺く度に苦勞した。そこで明和三年四月村民が集つて崖をくずしたところ一個の壺が出て来た。しかし皆畏れてその蓋をあけ得ず、近隣の莊殿寺の和尚に請うて蓋

をあけてもらつたところ、紺紙金泥の法華經が入つており、その終りに嘉祿元年（一一二五）按察使中納言が勅を奉じて丹後国滝尾寺に収めたものであることが分明了。

この村（熊浪村）の北方に大伽藍の跡があるそれがこの滝尾寺の跡だろう。近隣の人がこの噂をきいて参詣する者が夥しくなつた。

そこで領主田辺侯に報告しその命によつて、大乗妙典を三日間誦誦し石の箱を作つてこの写経を納めてその上に建物を建てた。

或人が故あつてこの村に滞留しある日この話を聞きその写経のうち一紙を得て四十年間秘蔵していたが、今年敝院（永明寺）にそれを持つてきて自分（住職）にくれた。そこで別に御衣の断片という古金爛を添えて表装し永く後世に伝えたいと思う。というのである。

右にいう或人というのが施主とある何鹿郡志賀村の甲斐島長左衛門如貞であろうし、筆者は文化五年すでに隠居していた永明寺の前任職機峯大和尚である。

以上の由緒によつて写経の断簡は鎌倉時代のものであり、それが入つた経筒が出たものであつて、二官神社の後は結局経塚であつたといえよう。

（ふくち山一七〇号より転載）

御開帖 聞書

「お壺さんにはもつたないお経が祀つてある、誰さんのせむしは一心に願をかけたら直つてしまつた。誰さんは足が不自由でイヤつて参つたが帰りにトントンと歩いて帰れた。川上の橋は詣り橋で川下が戻り橋……これを逆に詣ると罰が当る。」

などなど奇瑞を伝える話は随分多い。お供えには一文銭を六つ葉に通してお礼したとかで当時神主を勤めた人の蔵にはこの六文が俵に詰められて何俵も積まれていたという。

ことほど左様にあらたかなお壺さんであれば、百姓の死活を制する程の大早魁に遭つた時人々が「お壺さんに雨を禱ろう、万策つきたら神頼みするよりではない」となつたのもごく自然であるといえよう。

時は大正十三年八月、所は小字西飼、前代未聞の埋経開被の祈禱である。

嘉祿から明和まで五〇〇年、その間のどの時点で埋経されたかは遂に知るを得ないが、少くとも村人の記憶に全く残らぬ程はるかな昔に地下深く眠つた経文の、今日の姿はどうであつたらうか。

発掘の時しくも篤信の人の手に渡つた一部断片は永明寺に健在である。その大部分、

原本と見られる石函に蔵された本体が、陽の日を見るわけである。しかもこの祈禱会式に再び「ある不可思議」が出現したという。それはその場にあつた皆が見た、とあつては一寸したニュース価値はある。

幸い御開帖に奉仕し終始を目撃した人も現存している。本稿の筆者ら二人は、滝尾寺の旧跡を探り、経塚の遺構を知るよすがにもなるうかと考えた為、一夜次の各位の会同を願つて体験を語つてもらふことにした。昭和四十二年三月のこと。

出席者 岩田宇一郎氏 六七才

佐藤 太作氏 七〇才

別の機会 岩田 孝一氏 六二才

の証言者

話はこうである。

大正十三年のひでりは全く物凄いやかりで稲はまさに枯死寸前という有様だつた。雨を呼ぶ近道……それは伝承どおりにお壺社御開帖が一番だということになり、四名の奉仕者（佐藤儀作、井上源一、土井周太郎、佐藤蔵四氏）が選定された。

式場には七五三をつけた繩を張り氏子一同紋付姿に威儀を正す中に奉仕の四人は水ゴリで身を深め白衣をつけて厳かに開扉作業に掛つた。鎮守で経文……それはいりまでもなく

神仏混淆である。司祭として大川神社の高田宮司はノリトを奏し、法隆寺の水越道観和尚と莊嚴寺の岩崎道悟和尚は経を誦するといふ聊か奇妙な組合せだが、それを珍妙に思ふゆとりはすでに参列者にはない。

永年の開かずの扉が開かれると、中に一辺一米位、建物一ぱいの山石の蓋があり、その石蓋の上に

○古びた土蔵のカギのようなものが一つ、
○真鍮(?)製の金槌(槌部二寸、周三、四寸柄七、八寸、金柄)一箇……(この金槌は、高田宮司が鑑定をうけると断り持ち帰つて後所在不明)

さて、金テコで石蓋を上げると山石が粗くつまつた中に素焼の釜が三個、一それは高さが一尺五寸位、周が七、一八寸、下すぼまりの形をしていた。(※冒頭 立札の寸法に一致する)中には、紙とも苔とも判じ難いもの(岩田宇)蜂の巣か朽葉かと思えるような、(佐藤太)黒いボロボロの紙に鈍い銀色の字が走つていたものが(佐藤儀)

六、七寸の蠟燭を鼠がcaじつたような巻軸の朽ちたもの(岩田孝)が壺の中にあつた。奉仕の人はいやうやく之を拜殿へ捧持していくわけだが、とかくする中に道観和尚の

体に異常が現われ始めた。はじめ弘子をもつた両手がふるえはじめ、ついで全身がガタガタ震えてどうしても止まらぬ。一同あつけにとられたり神仏の威力に畏れたり……

堂の中の下にはまだ大石がふさつており、この下にも何かあるように思われたが(岩田)あまりおそれ多いので下は掘るな、ということになり発掘は中止され、急いで壺は旧に復した。この頃、この御利益でか、存心の一時的ではあつたが早天に俄かな大粒の雨がバラバラと降り、一同神仏の威力に感じ入つた。

○容器は前述の通りで銅筒のような特異なものではなかつた。(岩田) ※但し確にあつたという人が別の機会に出てきた。

○永明寺由緒書の石函、少くとも石室らしいものという確認は不十分でよく解らない。
○滝尾寺?は僧承のベツン山リュウビ寺だろう。龍尾寺と書くのでないか。(佐藤)

滝尾寺跡を求めて

滝尾寺といふ龍尾寺という「村の北方の大伽藍跡」とはどこか、杉本氏はこの探索中ついでベツンの岩田孝一氏宅の近辺だと推定した。以下岩田氏との対談から得た特異の点だ

け記すと次の通りである。(前掲と重複の部は省く。)

ベツンヨのタキオー寺(と岩田氏は発音する)は拙宅の前の麦畑が敷地だつたと伝える。今靴脱に使つている石も植込の石も寺跡から運んだという。(これは正に大建築の礎石にふさわしい平滑な石である)何時の頃かこゝを現状のように整地した時埋経が発見され、けがれを畏れてすぐ向うの宮山に埋めた、それが宮工事中に発掘された、と聞かされているのだが……

由緒書らしい軸が開帖当時あつて私も見てゐる。
それはヒダリウマ(黒)源氏女十一、という簡単なものでなく(※これは地元伝説)一米に三十程ほどの面に細字が沢山かかれていた。今はどこにあるか知らない。

かくて埋経の時代、経塚の遺構、その動機など現地を知りうる手がかりは遺憾ながら今の所ないのである。

(執筆者 伊田半治)